

## 「県民と県議会との意見交換会」 大船渡市会場 の概要

〔日 時〕 令和3年4月23日（金）13：00～14：50

〔場 所〕 大船渡市市民交流館カメラホール 多目的ホール

〔テーマ〕 女性の視点を生かした三陸の地域づくりについて

〔参加者〕 （7名）

佐々木 陽 代（大船渡インターホテル椿 マネージャー）

大 林 まい子（陸前高田市観光物産協会 職員）

黄川田 美 和（特定非営利活動法人陸前高田まちづくり協働センター 理事）

中 村 純 代（株式会社キャッセン大船渡 エリアマネジメントディレクター）

小 山 明日奈（藤勇醸造株式会社 広報・商品企画開発担当）

手 塚 さや香（フリーランス、釜石市移住コーディネーター）

岩 崎 昭 子（有限会社宝来館 女将）

〔出席議員〕（9名）

千葉秀幸議員（座長）、小西和子議員、軽石義則議員、工藤勝子議員、岩崎友一議員、

田村勝則議員、千葉盛議員、佐々木努議員、上原康樹議員

〔オブザーバー議員〕（なし）

### ◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

#### ○佐々木さん

震災後、被災した宿を母と再建した。オープンからことし9月で8年を迎える。高校までは大船渡市で過ごし、大学は仙台市へ出た。東日本大震災津波は大学卒業の1週間前であった。その後2年近く花巻市の宿で修行して大船渡市に戻ってきた。私で4代目になる。モットーは、女性ならではの視点で三陸を訪れるお客様に温かいおもてなしと、快適な宿泊環境を提供することである。

地域のまちづくりの取り組みにも顔を出している。子供たちが大船渡市に愛着を持つ、戻ってきたくなる、誇りに思える場所にするために、本州で水揚げ一位であるサンマにフォーカスをした取り組みや、幼い頃から身近に感じていた漁火が震災後に感じられなくなったことから、街中で漁火を再現できないかと始めた漁火イルミネーションプロジェクト等に携わっている。こちらは年末年始や3月11日等に帰省した方や観光で来た方に、なりわいである海をもう一度感じてもらいたいという思いから行っている。

#### ○大林さん

出身は陸前高田市であるが、幼少期は親の仕事の都合もあり、関東や関西に住んでいた。その後、東京都に住み、2016年に陸前高田市に来た。戻ってきたというよりは移住した感覚である。

現在、主に観光案内、観光情報発信及びイベント運営等に係る業務に携わっている。また、新たな取り組みとして、陸前高田市は著名な建築家が制作した建物がふえてきており、これらの建築物を活用したスタンプラリー等を行っており、5月1日からは高田松原津波復興祈念公園のパークガイドとしてデビューすることから準備を進めているところ。

力を入れて取り組んでいることとして、観光物産協会は観光を通じて地域を幸せにするという理念を掲げており、交流人口を拡大した先に何があれば地域は幸せになれるか常に考えている。地域にある資源を磨き続けることが大切であるという思いから、エコツーリズムの推進や地域の魅力の掘り起

こし等に取り組んでいる。観光関係者だけが考えるのではなく、地域全体で幸せを追求するために観光を考えていく取り組みを行っている。

### ○黄川田さん

団体としては、陸前高田市を拠点に東日本大震災津波の一年後から活動を開始した。中間支援ということで、地域、行政及びNPOや場合によっては企業をつなぐ活動を行っている。得意としている活動の一つとして、話し合いの場づくりがあり、特にも地域の中での話し合いの場づくりを大切にしている。地域の中で話し合った結果、できることは自分たちで行うことを合言葉にしている。とはいえ、中には自分たちではできないこともあることから、これらについては、行政や社会福祉協議会とも一緒に、また今後は周辺の自治体との連携も視野に入れながら進めたいと考えている。

また、地域の支え合い活動推進事業にも取り組んでいる。陸前高田市は超々高齢化社会といわれているが、高齢化の先にある人口減少においてポイントとなるのが地域づくりといわれている。ここにつながる一歩となる活動をスタートさせているところである。

### ○中村さん

生まれは九州である。大学からは東京都に行き20年ほど住んでいた。東日本大震災津波の年には海外留学を予定しており、しばらく海外に住んでいた。その後帰国し、遠野市にボランティアに来た。当初2週間の予定で考えていたが、そのまま居着いてしまった。岩手は本当によいところだと思っている。自然の豊かさ、食べ物の美味しさ、人の温かさなど日々実感して過ごしている。初めて行ったボランティアで関わった地元の人たちとの出会いがきっかけとなり、もう少しよいと思ひ今につながっている。

2017年にキャッセン大船渡のオープニングスタッフとして入社した。オープンしてから少しずつにぎわいを取り戻しつつあったが、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けてしまった。震災からの復興も歩みを止めなかったことが今につながっていると実感しており、各テナント、特に飲食店においては体力勝負ともいえる大変な状況にあるが、やり方を工夫しながら今だからこそやれることに地道に取り組む、引き続き皆さんと一緒に頑張っていきたい。

### ○小山さん

会社の創業は明治35年、自身は高校まで釜石市で過ごした。東日本大震災津波は大学の卒業間近のタイミングだった。留学や東京都での勤務等を経験した後、2013年にUターンし、2016年に現在の会社に入社した。

会社は東日本大震災津波により工場が被災し、一時事業継続が危ぶまれたが、全国からの支援もあり本格的に新商品開発を始めたところだった。当時は、若手の女性社員は自分のみであり、父である専務と一緒に、外部の女性とのつながりなども活かしながら商品開発を行った。また、県産素材を使用した新商品や地元企業とのコラボレーション販売等にも積極的に取り組み、この10年間で約10商品の開発につなげた。また、岩手県の企業マッチングを活用し、化粧品のブランドも立ち上げている。

新型コロナウイルス感染症の影響がある中で、オンライン販売が好調であるが、営業人材を確保し、販路拡大や販売強化にどうつなげるかが課題である。

### ○手塚さん

出身は埼玉県で、新聞社に入社し最初の赴任先が岩手県であった。これがきっかけで岩手が好きになり、東日本大震災津波の翌月から遠野市を拠点としたボランティア団体の活動に参加した。3年間新聞記者をしながら復興に関わってきたが、2014年に新聞社を退職し、釜石市の復興支援員の組織で

ある釜援隊に所属し、釜石地方森林組合において組織の人材育成等に携わってきた。

当時から岩手県の最大の資源は、一次産業であるという思いがあり、一次産業の活性化について力になりたいと考えての転職であった。釜援隊の活動はことし3月で終了し、4月からは個人事業主として活動している。

現在は、釜援隊時代から携わっている岩手県の移住交流体験ツアーの運営や、大槌町における獣害対策の取り組みとして、シカを流通させてジビエ等をコンテンツにした、人を呼び込む取り組み等を行っているところである。

## ○岩崎さん

岩手県議会において、東日本大震災津波を語り継ぐ日条例を制定したことに感謝している。岩手県には、3月11日は大切な人を思って過ごす日であることを世界中の方々にメッセージとして発信することをお願いしたい。

また、2019年にラグビーワールドカップが開催され、世界中から多くの方が釜石市を訪れた。私たちはこのスタジアムを岩手県の宝として活用していかなければならない。ラグビーワールドカップは岩手県と釜石市が一緒になって誘致したものであり、今後の活用についても、スポーツ交流を通じて三陸は復興したと言えるように、岩手県と釜石市が一緒になって進めていきたい。

外から来た方が、何種類もの仕事をしなければ生活が成り立たないことが現実問題としてあると思う。外から三陸に来てくれた優秀な方が、志半ばで帰る姿を何回も見てきた。これからも三陸の発展には人材が必要であると思うので、経済的な部分も含めた支援をお願いしたい。

## ◆ 意見交換

### ○小西和子議員

残念なことであるが、東日本大震災津波の後、沿岸地域から多くの人々が内陸地方や他県に流出しており最大の課題であると考えている。要因の一つとして、生まれ育った地域の不便さや閉塞感などをあげる調査結果もあるが、皆さんは居心地のいい沿岸地域にするためにどのような取り組みが必要であると考えているか。また、これらについて行政に対する要望があれば伺いたい。

#### 〔回答：黄川田さん〕

居心地のよさは人それぞれであることが大前提であり、若い人にとってのよい街なのか、高齢者にとってのよい街なのかというところでは線引きが難しいと感じている。

共通点は何点かある。地域づくりは地味なもの、評価されにくいものであり難しい面もあるが、まずは担い手を育てることが大切であると考えている。また、町内会の仕組みを見ていると、見直しがされないまま今までどおりの活動の継続を望む声が多いが、これからのことを考えた際に、人口が減り、高齢者がふえる中で、若い人など外から人が来てくれた際に、どのように一緒に取り組んでいくかを考えるうえでも、既存の活動について見直しをかける必要があると思う。

行政に対しては、要望というよりは協働していきたいと考えている。例えば国からきた事業をそのまま進めるのではなく、自治体の実態に即した形でビジョンを持って進めていく必要があると思う。策定段階から行政と民間が一緒になって取り組んでいくことができればよい。

#### 〔回答：中村さん〕

実際に住むようになって感じるのは、岩手県が好きだとか、岩手県にずっと住みたいという話をすると、地元の人からは、なんで？と言われることがある。謙遜もあると思うが、とてももったいないことだと思う。岩手県はよいところだとみんなが大きな声で言える、心から誇りを持って暮らせるこ

とがどの取り組みにおいても大切なのではないかと思う。

子供たちが進学等により一旦出ていくことは仕方がないことだと思うが、そこで地元とのつながりが切れてしまうかどうかポイントであると思う。外に出てもいつでも戻ることができる場所、友人や地域だけではないたくさんのつながりを作ること、小さなつながりをたくさん作り、いつ帰って来ても迎え入れてくれる場所を作ること、地元と関わり続けることができることが大切だと考え、日々のまちづくり活動の中でも取り組んでいる。例えばキャッセン大船渡では、高校生から大人までが一緒になって街の課題を自分たちで解決していくまちづくり大学という取り組みをしている。商店街の活性化をテーマにしたものに高校生が参加しているが、その下の中学生も巻き込みながら取り組んでおり、これもひとつのつながりであると感じている。高校生が将来外に出ても、いつでも戻って来られるきっかけとなればと思う。

#### **【回答：手塚さん】**

岩手県の資料だと、特に沿岸部は10代から30代の若年層の女性の流出が多くなっており、出席している岩手県東日本大震災津波復興委員会女性参画推進専門委員会でも話題にあがる。感じているのは、当事者たちが転出した理由が一切分からない状態で、なぜ流出が止まらないのかという議論を当事者不在で行っていることである。行政が打とうとする施策に、効果があるのかどうかも検証できていない状態であるとずっと言い続けている。行政への要望としては、まずは転出する当事者に対してヒアリングを実施して、転出する理由をしっかりと調べたうえで、必要な施策を打ってほしいと考えている。

また、居心地のよさについて、女性ということに特化すると、例えば同世代の女性の中で話題に出るのは、釜石市だと県立釜石病院で出産ができなくなることについてであり、心配する声はかなりある。そういう意味では、ふわっとした居心地よりも、医療環境がどうか経済的な面で収入が確保できるのか等、個別的な要因が積み重なって居心地のよさが決まってくるのではないかと思う。

#### **○工藤勝子議員**

岩手県で大きな課題はやはり少子化、人口減少であり、特にも若い女性の人たちが県外に出てしまう率が男性より高い。女性が県外に出ていくことは、それだけ少子化に拍車がかかることになる。各県ともコロナの中で予算を拡充しながら呼びかけているが、皆さんの移住、定住に関する考え方を伺いたい。

また、地域をつないでいくということは次の世代の人たちが残っていかなければならないことと思っているが、少子化に対する考え方を伺いたい。

そして、岩手の好きなおところ、直してほしいところを伺いたい。

#### **【回答：佐々木さん】**

少子化ということでは、私の同級生世代は、進学して大学を出て、そこで職を見つけて結婚するという流れが多い。家や家業を継ぐという場合しか戻って来ないのが実状。ただ、地元で子育てを頑張りたい、漁業をやりながら家族を支え私も輝きたいという同級生が多いことも確かである。

子どもを産み育てやすいという観点からは、大船渡で復興後、大きい公園ができたのは大きい。沿岸はバスや電車がなかった車社会だが、広い駐車場があり家族みんなで遊べて、できれば家族でわいわい食べて帰れるような飲食店があれば、街中で過ごす時間がふえるのではないかと。

大船渡の好きなおところとして、大船渡北小学校、大船渡中学校では、必ず郷土芸能を小さい時にやる。郷土芸能の教育というのは、他県の友人の話や聞くとやられていないことが多く、郷土芸能のリズムは魂に響くものがある。担い手の不足等はあるが、地域の公民館の行事や昔からの行事を、私た

ちが受け継いでいるところが好きだし、これからも絶やしてはいけないと思う。小中高のカリキュラムの中で、勉強だけではなく地域学習を取り入れていけば、地域のなりわいに関心を持ってもらえるのではないかな。

**〔回答：大林さん〕**

少子化については、岩手県に限らず全国的な問題だと思っている。収入という意味では、私の周りも、家族を持ち子供を養っていける収入を安定して得ている事業者は本当に少ない。それが当たり前になっていることが大きな問題であり、この問題が解決しないと県外に出てしまうと思う。楽しく子育てしている人たちもいるが、この課題が解決することが一つある。

岩手の好きなのところは、四季を感じられるところである。私は、東京や関西に住んでいた経験があり、冬が長く感じる。春が来て、タンポポが咲いたとかが凄く嬉しい。こういう気持ちで生活できることが贅沢だと日々感じている。

**〔回答：黄川田さん〕**

少子化については、大林さんがおっしゃったとおり収入という部分が多い。実際、私も2人の子育てをしていて、ようやく1人手が離れたところだが、まだ下の子がいる。その子が今後、進学を考えたときこのままで大丈夫なのかという心配がある。

子供が小さい頃は、公園やデパートがあればいいと考えるが、子供が大きくなるにつれ、親の収入がひとつの課題となる。そうした部分のカバーという言い方が適切かはわからないが、主人の両親と同居することで、助けられている部分はある。

岩手の好きなのところは、四季を感じられることも確かにそうだが、ここで生活している人が好きである。

**〔回答：中村さん〕**

外から来る人や交流人口をふやすことは大事と思うが、私は結婚して子どもを作ることだけが少子高齢化の解決だとは思っていない。

自分の選択で、一人で生きていきたいと思う時に、それがここで可能なのかと考えると難しい。震災後、岩手を好きになり、移住してきたカップルがいたが、奥様が妊娠し生活が成り立たないということで実家に戻ることになり、とても残念に思った。共働きで生計を支えることが基本にある状況の中で、なかなか2人目、3人目となると難しい。子育てをもう少し地域全体で支えてくれる制度があれば、ここで、みんなで子供を育てるという機運の高まりも大事だし、一方、単身で生きていく人たちに対してもサポートが必要。少子高齢化で一番困るところは労働力であり、高齢になっても元気で稼げる人たちがふえるのであれば、それはそれで一つの解決と思う。

統計では、岩手県の幸福度ランキングは19位であり、悪くない数値だと思っている。地元に対する愛着、地元をいたいと思う気持ちをもっと大切に、育むことにもっと力を入れたらよいと思う。

同じ統計で、岩手県の文化は45位である。私は、岩手県は文化豊かなところだと感じており、郷土芸能や地域の言葉、残っている史跡、自然も全て豊かな文化と思っている。海の文化も山の文化も本当に素敵だと思う。そういうところが皆さんの実感として、自分の体にしみ通っていないことがもったいないと思う。

岩手の一番の魅力は、先程おっしゃった方と同じで、春が来るのがこんなに幸せで待ち遠しいことを知らなかった。一步一步ゆっくりと春が来る。道端の花を見て、早採りワカメのお裾分けをいただいて春が来たなあと思うこと、そういうところが一番好きである。また生産者の方々と近いところにいられ、その方たちの作ったもの、採ったものを日々の食材として味わえることも魅力である。

**〔回答：小山さん〕**

少子化について、産婦人科がないということが一番大きい。婦人科クリニックも近くになくなってしまった。気軽に受診できないというのはやはり大きく、クリニックができたらいいが、年に1回、専門家の方に問診や話を聞いてもらう機会があれば、それだけでも悩みを共有できる。

岩手の好きなところは、釜石市出身で自然は当たり前になっていて、外部の方が地域に入ってきて、こういうところがよいと教えてくれることで気づいたところもある。遊ぶ所がないのも問題ではないかと思っている。仙台に行くことがしょっちゅうあるし、子育てでも内陸の方がよいと思えば、仕事も辞めて行ってしまうのではないかという気持ちもある。そういう20代、30代も多いと思うが、そういう声が届いていないと思う。

**〔回答：手塚さん〕**

少子化対策について、移住促進の取り組みをする中で、コロナ禍でリモートワークができるようになってから、盛岡市や花巻市に転居した人たちを知っている。毎週末バーベキューできるような環境のよさがあり、移住ツアーでも、子育て環境を充実させたいというファミリーの参加が毎年あるので、県外で所得を確保できているリモートワーカーを連れてくるのはあると思った。

好きなところは、昨日も定置網漁を営んでいる漁師と話をしたが、そういう人たちから、もっと釜石を楽しみたい、地域を活性化したいという話を聞いた時、釜石はよいところだと思う。そういう人たちが自分たちの食や林業を支えてくれていて、そういう人たちが身近にいる暮らしは豊かだと思う。

**〔回答：岩崎さん〕**

宝来館の目の前の根浜海岸は海水浴場だったが、人工の砂浜を戻して松林も残り、海浜植物も見られ、もとの三陸の風景が残っている。

少子化をすぐに解決するのは難しい中で、住んでいる私たちが「ここは居心地がよく、生き物が生きやすいところだ」と思えるような地域づくりをしている。海浜植物をふやししたり、子供たちがマスクを外して遊ぶ活動をしている間、若いママたちは料理教室をやってお昼を一緒に食べたり、ラグビーの選手も来て遊び方を教えたり、病院の先生方にはコロナ感染対策を教えてもらうなど、地域の中でできることを丁寧にやりながらきたのが、今のコロナ禍の一年だった。

鵜住居にはスタジアムがあり海もあるが、大槌には特別なものが何もないという中で、ないからこそ日本の風景が実は残っているところもあり、生き物の方が「ここは生きやすいところで住みたい」と思うようなことを丁寧にやっていくしかないと思っている。

そして、それを若い人たちがすごく一生懸命やっている。この情報をいっぱい出していかなければならない。それに価値があるということを知っていただくための発信をしていきたい。経済がなければそこに住み続けることができないので、一つは企業研修で全国の会社に来てもらい、できれば居付いてくれる、働き場所を作ってくれるような仕掛けをし、働くことと居心地のよさをマッチさせていただくことを希望する。

**○田村勝則議員**

東北ディステーションキャンペーンも始まり、岩手が盛り上がりつつあると思っているが、三陸の地域づくりには大きく二つのことが必要と考えている。

一つは、なりわいの再生。県では宿泊応援事業を始めたが、今どういう状況なのかお伺いし、県に要望があれば教えてほしい。

もう一つは交流。復興道路ができたおかげで本当に近くなったと感じている。コロナ禍の中なので

外国からは難しいが、県内の交流だけではなく国内の交流をしっかりとしていく必要がある。この先を考えた場合、沿岸の地域づくりに交流は重要。東日本大震災津波伝承館を起点にした交流が広がればよいと思うが、この点について皆さんから御提言、御意見があればお伺いしたい。

**【回答：佐々木さん】**

当ホテルでは、ビジネスのお客様、震災直後は長期滞在のお客様、ゴールデンウィークや帰省、スポーツ団体のお客様がいる。60人ぐらいの定員のホテルではあるが、色々なジャンルのお客様がいらっしやっている。コロナ禍で、東北各地からの出張の方のうち仙台市からは減ったという印象。復興割やGoToキャンペーン等、県や市の割引があるが、割引の仕方や提出書類が複雑で、現場は結構大変である。提出書類も、各予約サイトで統一されていない。お客様が少ないことに加え、コロナ対策をして書類も作らなければならないので、おもてなしの域までいくのが厳しい状況である。

ただ、今回のゴールデンウィークに関しては、予約のお客様もあまりキャンセルになっていない。「いわて旅」が始まったこともあり、震災から10年の現場を見てみようとする、花巻市、盛岡市からのお客様が多い。東京や関東からのリピーターのお客様も多い。春になると山に釣りに入る川釣りのお客様が結構いらっしやる。自然は強い武器であり、そういうところを道路も近くなったということもありPRできればよいと思う。インパクトはないが、大船渡市は地道に復興が進んでいるという感覚である。復興後まずまず開けた街になってきたのではないかと思っている。

東日本大震災津波伝承館を起点にという話もちろんあるが、やはりハードではなく、その地域に暮らす人との交流の時間や触れ合ってもらえるような機会を作ればリピートする人がふえるのではないか。ホテルでも、ホテルというよりも岩手の人会いに来たというところが大きい。ディステーションキャンペーンを機会に、自然と街の人と交流を組み合わせたツーリズムを作っていければ、大船渡らしい沿岸らしい観光の一つの形ができるのではないか。

**【回答：大林さん】**

東日本大震災津波伝承館を起点とした交流人口については難しい課題。東日本大震災津波伝承館には、去年の時点でオープンから20万人の来訪者があった。来た方は東日本大震災津波のことを学び、それぞれの想いを持っていて、その想いがつながっていくということでは意味深くとても大事な施設だと思っているが、入館料も無料であり、来た方からどれだけ収入が得られているのかは見えていない。道の駅の売り上げも、20万人も来ている施設の隣にあるのにとっても厳しい。

東日本大震災津波伝承館に来たお客様を、点で終わらせず、すぐ近くにある中心市街地に行ってもらい陸前高田市にどれだけ留まってもらうかということだが、なかなかそこにお客様が流れている実績を掴めていない。ただ必死にやっているが、観光客の目線になれば、限られた時間の中で東日本大震災津波伝承館に行った次は街中に行くかな？と考える。陸前高田市のことだけを考えることが本当によいことなのか、何が正しいのかはわからないが、どうしたらお客様に喜んでもらえるかというお客様の目線で何かを作っていくことが重要と思っている。

**【回答：岩崎さん】**

宝来館は、被災前は地元のお客様で生きてきたが、被災後10年間で、観光の宿として選ばれる宿づくりをしようとターゲットを観光に絞り、国、県の制度を使ってここまで来た。ワールドカップを機に、考えたことは大体クリアでき目標とした数字は出せると思っていた。売り上げを伸ばしリピーターをふやしてきたが、コロナでまた振り出しに戻った。観光の宿としてがんばってきたつもりだが、6月夏までを自力で保てるかということ、自分で生きていく力はほとんどないという状況である。お客様の流れがあって初めて生きられるという状況でここまで来た。大都会では緊急事態宣言などが出て

いるが、観光のお客様は緊急事態宣言が出た所だけではなく、地方の私たちがその大変さを一番感じている。政策で、岩手県内で回りましようというのは確かにそうで、この2、3日釜石の人は泊ってくれるが、もっと大きな動きがなければ明日がない。

岩手の観光は、今20万人が来ている陸前高田市がありながら、地元はそれで回るのかと悩んでいる。みんな悩んでいてこれだけ来ているのに誰も潤っていない。今こそ、市町村ごとに悩むのではなく、岩手全体でどうやって岩手の沿岸に観光の流れとお金を落とすかを考えるべき。今であればコロナ政策で、国はいい企画を出せばお金を出す。岩手の観光として、岩手県の魅力を知ってもらい、どう観光を動かすか。ピンチの時はチャンスと言うが本当にそうであり、みんな大変だからどうにかしたいと思っている時に、もし岩手県議会の皆さん主導で「こうやれば観光が動く、内陸を含めた岩手県内でこんなに魅力があるから作ろう」と動いてくだされば一つにまとまる。

今までは隣のことは隣、内陸のことは内陸だったが、震災から10年が経ち、今こそ県が岩手の観光はこういうネットワークだと色々な事業の企画を出し、それぞれの分析もしながら本当の悩みを解決する仕組みを作っていくべき。岩手の内陸と沿岸が一つになって観光をやっていくこと。岩手県をどうアピールして魅力につなげるか、そこで生きている自分たちは精一杯であり、見せ方は皆さんである。ぜひ知恵を絞っていただいて、個々に悩み、頑張っている市町村を指導していただきたい。

#### 〔回答：大林さん〕

人口流出のときに結局、当事者がどうして流出しているかわからないという話があった。20万の人が東日本大震災津波伝承館に来た後、どうして陸前高田市に留まっていないか、岩手をなぜ周遊してもらえないかという調査ができていない。

観光客からはよい意見はたくさんいただけるが、悪い意見は見えづらい。県で力になってもらえるところがあるとよい。

#### ○上原康樹議員

皆さんは、日頃地域の魅力というのをSNSで発信されていると思う。素晴らしい発信がされているが、これを首都圏の皆さんが見るときに、どうしても観光パンフレットで知っているような情報が多いのではないかと考えている。

実は岩手県に関心を寄せる人は凄くコアな、この旅館のこの女将が「これがいいよ」という私だけの絶景ポイント、私だけのその時間帯の光の素晴らしさ、波の素晴らしさといったような、一人一人の感性を通じたお勧めの情報をみんな求めているようである。皆さんがその地域に住んでいて感じる、私が発見した選んだ情報を幾度も発信するということは、とても価値があることと思うが、どのように感じているのか伺いたい。

#### 〔回答：岩崎さん〕

根浜海岸では砂が戻り、この間ウミガメが戻って来て産卵していた。今からの時期が、海の光の当たり具合が一番よい時期で、橋野鉦山は萌えの緑が出て、朝早く3時ぐらいに宝来館を出発して、朝やけのころに山にのぼると太陽の光が黄金に輝く。春ゼミも鳴く。海の光の当たり具合、同時に山も美しいという一瞬の時間をぜひ見に来てほしいと思う。ウミガメの産卵の話は、みんなで内緒にしようと言っていて、ここで初めて言ったが、隠しては守りにつながらないと教えてくれた方がいた。自分たちのよいところをいっぱい発信したい。

**〔回答：佐々木さん〕**

岩手県は芸術家が凄く多いと感じている。最先端の文化、芸術ではないかもしれないが、身近に絵を描く人、彫刻を作る人、写真を撮る人が多くいる。

私の祖父も昔から絵を描いていて、祖父の絵を全客室に飾っているが、そういう発信も一つかと思っていて、ホテルのSNSに上げたりしている。ハッシュタグの付け方も勉強中だが、コアなところで「いいね」してくださる芸術家がいらっしやる。そういうところを、地域、宿、私たちも勉強して、写真の撮り方も考えて、ここを見てほしいというところを発信していけばよい。女性にはやりたいという人が多いと思うが、やり方がわからないという人がいると思う。若者向けSNSの発信の勉強会をもう少し充実させることができれば、もっと岩手のハッシュタグがふえ、来ていただける方がふえるのではないかな。

**〔回答：中村さん〕**

地元の人にとって宝ものような光景であっても外の人に十分に伝えきれていない、あるいは宝ものと気づいていないこともたくさんあると思う。SNSは色々な功罪が語られているが、みんなでよいところを見つけて発信していくという流れを、県や皆さんと一緒にやって作ることができたら面白い。

また、岩手県でのインターネットの普及率は44位とのこと、もったいないと感じている。コロナでオンライン会議とかテレワークといった流れが一気に進んだが、一方で高校生たちとオンラインで会議しようと思ったらWi-Fiがない、使えないという子も多くできなかった。学生はスマホもパソコンも同じように使いこなすので、パソコンがなくても岩手県全域でのインターネット環境がよくなることは、SNSの発信率などの情報発信を向上させる近道ではないかと思う。

**〔回答：黄川田さん〕**

NPO法人高田暮舎と共同開催で、移住定住をテーマとした人生ゲームをやったことがあり、その中で移住してきて嬉しかったことを聞いたことがあった。移住して来た方は、お裾分け文化がすごく嬉しいとSNSで発信してくれていた。

逆に、こちらに移住してきて、ちょっとした困りごと、気になるようなことについても人生ゲームの中で聞いているが、移住して来た方は、地域の人と触れ合うことによって顔見知りになり、いつも声をかけてくれることが嬉しいそうだ。

**○千葉秀幸座長**

本日は皆様から貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。

本日頂戴した御意見、御提言については、県議会の全議員が情報共有し、今後の議会活動に生かしていく。これからも県議会に対する御意見や御提言があれば地元の県議会議員、あるいは県議会事務局までお寄せいただきたいと思う。

本日はお忙しいところ、御参加いただいたことに感謝申し上げ、意見交換会を閉会させていただく。